

社会的比較状況と課題の質が同調行動に与える影響

埜 雄士¹・古谷嘉一郎²・塚脇 涼太¹

Effects of the state of social comparison and quality of tasks on conformity

Yuji TAO, Kaichiro FURUTANI and Ryota TSUKAWAKI

【要旨】同調行動 (conformity) とは他者や集団からの圧力により人の行動や意見が変化することである。また事実に関する証拠として他者から得られた情報を受け入れる影響である情報の影響と、他者の積極的な期待に従おうとする影響である規範的影響の二つの影響が同調行動の生起に関係している。本研究では、個人間比較状況と集団間比較状況の2種類の社会的比較状況及び、答えが明確な課題と不明確な課題の2種類の課題の質が同調行動にどのように影響するのかを実験により検討した。その結果、課題の答えが明確、不明確に関わりなく個人間比較状況より集団間比較状況の方で同調率が高かった。また、個人間比較状況に比べ集団間比較状況で規範的影響を強く受けていたことが明らかとなった。課題の影響については、集団間比較状況における明確な課題で規範的影響と同調に相関はみられず、情報の影響と同調に負の相関がみられた。

【キーワード】同調行動 社会的比較状況 課題の質

問題

はじめに

同調行動 (conformity) とは他者や集団からの圧力により人の行動や意見が変化することである (亀田、2000)。

同調行動の古典的実験として、Asch (1951) が挙げられる。Asch (1951) はある線分 (比較刺激) が3つの線分 (標準刺激) の中のどの線分と一致するかという課題を、4名からなる集団に実施した。課題は容易に答えが分かるものであった。集団成員は、あらかじめ誤った解答を行うように指示されていた実験協力者と最後から2番目に解答するような状況におかれ何も指示されていない実験参加者 (1人) から構成されていた。実験の結果、参加者全体の約30%が18回中1回は協力者の誤った回答に同調していた。また、Asch (1951) は多数派の人数を操作し再度、検証している。その結果、3人から4人が最も同調率が高く、それ以上の人数になっても同調率に変化がないことを

見出している。

Asch (1951) の古典的研究から、Deutsch & Gerard (1955) は、事実に関する証拠として他者から得られた情報を受け入れる影響である情報の影響による過程と、他者の積極的な期待に従おうとする影響である規範的影響による過程の二つの影響過程が同調行動の生起に関係していると論じている。また、その生起には個人の動機づけを左右する状況が重要であるとしている。

同調行動の生起要因については、種々の観点から検討がなされている。たとえば、木下 (1964) は、集団凝集性の高さの程度と課題の重要性を掛け合わせた実験を行った。その結果、同調が最も顕著に現れたのは集団凝集性が高く課題の重要性が低い条件であり、つぎに顕著であったのは集団凝集性が高く課題の重要性が高い条件であった。つまり、集団凝集性が高いほど同調行動が生起しやすくなった。また、Allen (1965) は集団内で低い地位にあること、高い地位に対する願望と実際に置かれている地位の間に大きな相違があることが、同調行動を起こさせる要因であると論じてい

¹比治山大学 ²北海学園大学

る。その他にも自己意識（黒沢、1993）などを要因とした検討がなされてきた。しかしながら、同調行動における個人の動機づけと状況の操作の組み合わせの検討は十分ではない。本研究では、この個人の動機づけとして社会的比較によって生じる個々人の動機に着目した検討を行う。

社会的比較状況と同調行動

Brewer & Gardner (1996) は、社会的比較の観点から個人の動機づけが活性化される状況を検討している。Brewer & Gardner (1996) によると、人は個人間比較状況、集団間比較状況によって、それぞれ活性化される自己概念が異なり、その結果として異なる動機づけが生起するとしている。個人間比較状況では自己の特性が自己評価の基準となることで個人的な自己概念が活性化されることにより、自己の利益に基づく動機づけが高まる。一方、集団間比較状況では所属する集団が自己評価の基準となり集合的自己概念が活性化されることにより、所属する集団の利益に基づく動機づけが高くなる。社会的比較状況の違いを同調行動と照らし合わせると、個人間の比較状況では自己の利益に基づく動機づけが高まり、課題に対し正しい答えを手に入れたいために、客観的な情報を収集しようとする努力を始めるであろう。よって情報的影響による同調が生起しやすくなると考えられる。一方、集団間の比較状況においては、集団の利益に基づく動機づけが高まることで、課題の正しい答えを得ることよりも、所属集団のメンバーから承認を受ける、もしくは排斥されないように努力するであろう。よって規範的影響による同調が生起しやすくなると考えられる。

課題の質と同調行動

さらに、Deutsch & Gerard (1955) は課題の質の影響も論じている。例えば、答えが明確な課題では、正しい答えがわかるため、他人の意見を証拠とする必要がなく、規範的影響に基づく同調が生起しやすい。一方で、答えが不明確な課題の場合、情報的影響に基づく同調が生起しやすくなると考えられる。

目的

本研究では、社会的比較状況と課題の質を組み合わせ同調行動がどのように生起するのかを検討する。

方法

参加者

実験参加者は男性17名、女性27名の計44名であった。平均年齢は19.8歳であった。

実験デザイン

社会的比較状況（2：個人間比較状況・集団間比較状況）と課題の質（2：答えが明確な課題・答えが不明確な課題）を独立変数とする参加者間2要因計画であった。従属変数は各条件における同調率（0～100%）と社会的影響源の得点であった。

社会的影響源の測定

社会的影響源を測定する項目を、宮島（2008）の研究で使用された項目を基に作成した。規範的影響を測定する項目として「(a) 今回の調査に参加していただいた3名と違う回答は嫌だなどどのくらい感じましたか」、情報的影響を測定する項目として「(b) 今回のテストの正解がどのくらい気になりましたか」の2項目を用意した。(a)は、「まったく嫌だと感じなかった（1点）」から、「とても嫌だと感じた（6点）」までの6段階であった。(b)は、「まったく気にならなかった（1点）」から、「とても気になった（6点）」までの6段階であった。

実験課題

課題はそれぞれの条件で10問行った。答えが明確な課題として、最も多い図形を探し出す課題を用いた。比較刺激は円、三角形、四角形の図形や、動物や乗り物の絵であった。標準刺激として、比較刺激にある3つの図形や絵が縦約10cm、横約15cmの四角の中に散り散りに配置された。比較刺激にある選択肢から、標準刺激の中で最も多い図形や絵を選択するという課題であった。答えが不明確な課題としてArcher (1980) より抜粋した、写真を用いたテストを実施した。問題用紙に写真を掲示し、写真に写っている人びとについて回答するというものであった。

操作チェック質問紙

操作チェック質問紙の項目はTuner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell (1987) の自己カテゴリー化理論に基づき、「(1) 現在、調査を行っている3名のグループのメンバー同士は、競争的だと思いますか、協力的だと思いますか。」「(2) あなたは、調査を行っている3名のグループをどれくらい意識していますか。」「(3) あなたは他のグループの課題のできがどれくらい気になりますか。」「(4) あなたは、あなたのグループと他のグループはどのくらい競い合っていると思いますか。」の4つの項目を用意した。(1)は、「協力的」と、「競争的」の2件法であった。(2)は、「全く意識していない（1点）」から、「とても意識している（6点）」までの6段階であった。(3)は、「まったく気

にならない（1点）」から、「とても気になる（6点）」までの6段階であった。(4)は、「全く競い合っていない（1点）」から、「とても競い合っている（6点）」までの6段階であった。

実験内容に関する質問項目

実験内容に関する質問項目として「(1)テストに回答するとき、Aさん・Bさんの回答をどのくらい気にしましたか」、「(2)今回出題されたテストは簡単でしたか。難しかったですか」の2つの項目を用意した。(3)実験内容に不信感があったかどうかなど自由記述で回答する項目も用意した。(1)は、「全く気にしなかった（1点）」から、「とても気になった（6点）」までの6段階であった。(2)は、「簡単だった（1点）」から、「難しかった（6点）」までの6段階であった。

手続き

参加者には「最新の心理テストに関する調査」という偽の目的を事前に説明し後日、実験に参加してもらった。参加者と対面時に一言挨拶をした後、面接室へ案内し、入室前に指示があるまで他の参加者との会話や接触はしないようにすることを伝えた。実験室の状況をFigure1に示した。参加者は、靴を脱いで入室することになるため、架空の参加者の靴も入口に置いておいた。実験参加者は入口から一番手前に着席してもらった後に、実験者は実験の説明と実験上の注意を実施した。実験説明の主な内容として3人ずつのグループが複数作られ実験を実施していることの説明がなされた。実験説明の際に個人間比較状況と集団間比較状況で別の教示を行った。個人間比較状況においては「今回行っていただくテストは個人の能力を測ることが主な目的として作られています。そこで今回は、今来ていただいている3人の中で一番よい成績を上げた人に報酬を差し上げたいと思いますので、皆さん頑張ってください。」と教示した。集団間比較状況では「今回のテストは皆さんのチームワーク能力の成果を測ることが主な目的となっています。そこで今回は、今来ていただいている3人のグループと、皆さん以外の他のグループの中で最もよい成績を上げたグループに報酬を差し上げたいと思いますので、皆さん頑張ってください。」と教示した。実験の説明を実施した後に、実験参加者には操作チェック質問紙に回答してもらった。回答が終了し次第、用紙を回収し課題の回答方法についての説明を行った。その後、10セッションの課題を行った。課題の回答方法は、隣から課題用紙が回って来次第、すぐに回答を行い、回答し終わった

らペンを置いて待つておくように説明した。すべての課題を解き終わって実験内容に関する質問紙に回答してもらった。実験内容に関する質問紙への回答が終了し回収した後に、ディブリーフィングを実施し、参加者からデータ利用の許可を得た。

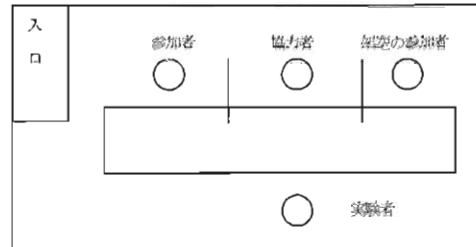


Figure1 実験室の状況

結果

分析対象の選別

実験内容に関する質問項目において、実験内容に対する不信感や違和感を示す回答が見られなかったことから、44名全員が架空の実験目的を騙して参加していたと解釈し、全員を分析対象とした。

操作チェック

操作チェック項目2、項目3と項目4の得点についてt検定を用いて社会的比較状況を分析した結果、有意な差は認められなかった ($t(42)=0.12, ns$)。そのため、実験参加者について社会的比較状況（個人間比較状況・集団間比較状況）と、項目1（競争的・協力的）を回答種別にクロス集計を実施し、Fisherの直接法を用いて分析した結果、有意な偏りがみられた ($\chi^2(1, n=44)=22.49, p<.01$)。具体的には、個人間比較状況では競争的な方に、集団間比較状況では協力的な方に人数が偏っていた。これらのことから、操作については一定の妥当性が認められたといえるが、結果の解釈は慎重に行う必要があると判断した (Table 1)。

Table 1 比較状況別にみた競争的・協力的の選択人数 (単位：人)

	競争的	協力的	n
個人間比較	14	7	21
集団間比較	0	23	23

社会的比較状況と課題の質が同調率に及ぼす影響

社会的比較状況（2：集団間比較状況・個人間比較状況）と課題の質（2：答えが明確な課題・答えが不明確な課題）の組み合わせごとに同調率の平均値と標準偏差を算出した (Table 2)。

Table2 社会的比較状況と課題の質の2要因分散分析の平均と標準偏差

		明確な課題	不明確な課題
個人間比較	<i>n</i>	10	11
	平均値	0.23	0.65
	標準偏差	0.31	0.18
集団間比較	<i>n</i>	11	12
	平均値	0.51	0.83
	標準偏差	0.41	0.21

次に、社会的比較状況（2：集団間比較状況・個人間比較状況）と課題の質（2：答えが明確な課題・答えが不明確な課題）を独立変数、同調率を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果、社会的比較状況と課題の質それぞれの主効果が1%水準で有意であった（Table 3）。集団間比較状況（ $M=0.67$ ）よりも、個人間比較状況（ $M=0.44$ ）において同調率が低いことが明らかとなり不明確な課題（ $M=0.64$ ）よりも、明確な課題（ $M=0.26$ ）において同調率が低いことが明らかとなった。

Table 3 社会的比較状況と課題の質に関する2要因分散分析

	<i>ss</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	検定
課題の質	15.77	1	15.77	$F=17.24$ $p<.01$
社会的比較状況	5.99	1	5.99	$F=6.55$ $p<.01$
交互作用	0.33	1	0.33	$F=0.36$ <i>ns</i>
誤差	36.59	40	0.92	

社会的比較状況と課題の質が社会的影響に及ぼす効果

社会的比較状況（2：集団間比較状況・個人間比較状況）と課題の質（2：答えが明確な課題・答えが不明確な課題）を独立変数とし、情報的影響、規範的影響をそれぞれ従属変数とする分散分析を行った。情報的影響については主効果、交互作用共に認められなかった。一方、規範的影響について、社会的比較状況の主効果が認められた（ $F(1, 40) = 4.19, p < .05$ ）。集団間比較状況（ $M=3.46$ ）の方が個人間比較状況（ $M=2.41$ ）に比べて、規範的影響が高いことが明らかになった。

社会的比較状況と課題の質別での社会的影響と同調行動の関連

社会的比較状況（2：個人間比較状況・集団間比較状況）と課題の質（2：答えが明確な課題・答えが不明確な課題）の組み合わせごとに、情報的影響、規範的影響と同調率について相関分析を行った（Table

4）。その結果、集団間比較状況の答えが明確な課題で情報的影響と同調率に負の関連が認められた。また、個人間比較状況の答えが不明確な課題において規範的影響と同調率に正の関連がみられた。

Table 4 各群における規範的影響、情報的影響、同調率の相関係数

	不明確な課題		明確な課題	
	情報的影響	規範的影響	情報的影響	規範的影響
個人間比較	.33	-.73**	.53	.19
集団間比較	.07	.07	-.68**	.16

Note. ** $p < .01$

考察

本研究の目的は、社会的比較状況と課題の質を組み合わせ同調行動がどのように生起するのかを検査することであった。

操作チェックの問題点

操作チェック項目2と項目3、項目4の得点をt検定を用いて集団間比較条件と個人間比較条件で比較した結果、有意な差はみられなかったことから、社会的比較操作が十分ではなく、個人的自己概念と集合的自己概念を完全には活性化してはいなかったと考えられる。その要因として、教示文が挙げられる。個人間比較条件・集団間比較条件それぞれの教示文において、他の参加者や他の集団の情報が少ない事によって、比較対象が想起されづらく、社会的比較までには至らなかったのではないだろうか。しかしながら、項目1（競争的、協力的）をFisherの直接法を用いて分析した結果、1%水準で有意な偏りがみられたことから、個人間比較条件においてはメンバーを競争的にとらえ、集団間比較条件においてはメンバーと協力関係にあると認識していたといえる。よって、個人間比較条件では個人間比較を行っており、集団間比較条件では集団間比較までは行われず、協力関係にあることだけは認識していたと考えることができる。

社会的比較状況と課題の質が同調率に及ぼす影響

同調率を従属変数とし社会的比較状況と課題の質を独立変数とした2要因分散分析を行った結果から、集団間比較状況よりも個人間比較状況において同調行動を生起しにくいことが明らかになった。これはBrewer & Gardner (1996) から説明可能であろう。つまり個人間比較状況では、自己の利益が動機づけのために集団の利益を考慮することがなく、同調行動が生起しにくくなるのではないだろうか。次に、社会的

比較状況と課題の質を独立変数とし、情報的影響、規範的影響をそれぞれ従属変数とする分散分析を行った結果、集団間比較状況の方が個人間比較状況に比べて、規範的影響を強く受けていたことが明らかになった。つまり、集団間比較状況に置かれた個人は集団成員の判断に対し、嫌われたくないあるいは承認を得たいという動機づけが働いていたのであろう。また本研究では同調率に課題の質の効果があることも示された。答えが明確な課題は不明確な課題に比べ同調率が高かったことから、人は確信が持てる場合は他者の判断に影響されることはないが、確信が持てない場合は他者の判断に同調するのではないかと考えられる。

ところで、本研究において課題の質は同調行動にどのように作用していたのであろうか。課題の質と社会的比較状況の組み合わせごとに、情報的影響、規範的影響と同調率について相関分析を行った結果、集団間比較状況の明確な課題で情報的影響と同調率に負の関連が認められた。また、個人間比較状況の不明確な課題において規範的影響と同調率に正の関連がみられた。以上の結果から、集団間比較状況では、答えが明確な課題において情報的影響に基づく同調を回避していた。このことから、答えが明確な課題は規範的影響を生起させやすくするのではなく、情報的影響による同調を抑制する働きがあることが示された。しかしながら、答えが明確であってもその課題の難しさ等を考慮する必要があり、この点は今後の課題である。

引用文献

- Archer, D. (1980). *How to expand your S. I. Q.* New York: M. Evans and Company. (D. アーチャー. 丁)
- 藤 力・市村 英次 (訳) (1988). ボディーランゲージ解読法 誠信書房
- Asch, S. E. (1951). Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments. In H. Guetzkow (Ed.) *Groups, leadership and men: Research in human relations*. Carnegie Press, pp. 177-190.
- Allen, V. L. (1965). Situational factors in conformity. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 8. New York: Academic Press, pp. 133-175.
- Brewer, M. B., & Gardner, W. (1996). Who is this "we"? Levels of collective identity and self representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 83-91.
- Deutsch, M. & Gerard, H. B. (1955). A study of normative and informational social influence upon individual judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 629-639.
- 木下稔子 (1964). 集団の凝集性と課題の重要性の同調行動に及ぼす効果 心理学研究 35, 181-193.
- 宮島裕嗣・内藤美加 (2008). 間接圧力による中学生の同調 —規範的影響および情報的影響と課題重要性の効果— 発達心理学研究. 19, 364-374.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D. & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, England: Blackwell. (ターナー・J.C. 爾 千壽・磯崎三喜年・内藤 哲雄・遠藤 由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見 —自己カテゴリー化理論 誠信書房)